

2020 年度事業報告書

特定非営利活動法人パノラマ

2020 年度事業一覧

1. 学校連携事業	
(1) 校内居場所カフェ事業	自主事業
(2) ボランティアさん養成講座事業	自主事業
(3) 校内個別相談事業	自主事業
(4) 入学前支援事業	自主事業
(5) 中退者・卒業生支援	自主事業
2. サードプレイス提供事業	
(1) 居場所居酒屋「汽水」事業	自主事業
3. 若年者就労支援事業	
(1) 有給職業体験「バイターン」事業	自主事業・補助事業
4. 若者自立支援事業	
(1) よこはま北部ユースプラザ事業	補助事業
5. 啓発事業	
(1) 校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業	自主事業
(2) 各種広報事業	自主事業

【第 1 号議案】2020 年度活動報告

2020 年度事業報告

1. 校内連携事業

(1) **校内居場所カフェ**：高校内に居場所カフェを開き、スタッフや多様なロールモデルであるボランティアさんと、日常会話から信頼貯金を貯めつつ、将来の糧となるヒト・モノ・コトの文化資本を高校生に提供する。中退や進路未決定の予防にとどまらず、将来的な社会関係資本への接続から経済資本への獲得を見据えた事業。

連携団体：NPO 法人スペースナナ、一般社団法人お寺の未来（おてらおやつクラブ）、
フードバンク各団体 他

コロナによる影響：校内居場所カフェは、2020 年 4 月から 8 月までは活動自粛。
9 月から限定的に再開したものの、1 月からは再び緊急事態宣言を受けて活動自粛となりました。

校内居場所カフェの振り返り

コロナにより、開催数が大幅に減少し、感染防止の観点から、運営スタイルや時間等にも変更が生じ、これら影響で平均利用者数は前年の半数以下となった。大きな要因としては、新1年生向けオリエンテーションが実施できず、カフェの存在を知らない生徒も多数存在するものと思われる点及び、オリエンテーションが実は私たちと新一年生とのアイスブレイク的な機能を果たしており、これが実施できなかったため、緊張して入って来られない生徒もいたと思われる。

カフェが開催できなかったことは非常に残念であったが、オリエンテーションの機能しかり、当たり前だったことが当たり前ではなくなったことで、様々なことが見え、足元を見つめ直す良い機会になったとポジティブに捉えている。

例えば、飲料の提供ができなくなった BORDER CAFÉ では、生徒の滞在時間が圧倒的に短くなった。これにより、生徒と表層的な付き合いしかできなくなってしまった。支援につながるディープな話は、空腹を軽く満たし、友達とのお喋りなどが一通り終わり、やることがなくなってから、ぽろりと語られるのだが、そこまでの足掛かりがなくなってしまったように感じている。

カフェ反対派教員からの、「なぜ（お菓子やジュースを出す）カフェである必要があるのか？」という問いに対する答えを見つけたような思いがしている。お茶さえあれば、老若男女、人は何時間でも語り集い、絆を深めるものなのだ。

再開したカフェで出会った 1 年生に話を聞くと、恐らく長期の休校により、学校に定着できずに中退した 1 年生たちがかなりいたようである。他愛のないオリエンテーションで、もしも辞めていった生徒らと出会い、カフェで戯れ、どろっぴんにつながっていれば、何割かの生徒が学校に残れたのではないだろうかと思像すると、残念でならない。

また、大和東高校では大和市社協の協力のもと、地元の方々のボランティア参加が定着しつつあったが、コロナにより高齢のボランティアさんたちの足が学校から遠のいてしまった点も非常に残念であった。

2020 年度実績 （ ）内は 2019 年度実績

カフェ名/実施校	開催数	参加生徒数	ボランティア参加
ぴっかりカフェ 神奈川県立田奈高校	11 回 (33 回)	537 名／平均 49 名 (3,325 名／平均 100 名)	66 名 (250 名)
BORDER CAFÉ 神奈川県立大和東高校	17 回 (31 回)	586 名／平均 35 名 (2,525 名／平均 81 名)	51 名 (100 名)
合計	28 回 (64 回)	1,123 名／平均 41 名 (5,850 名／平均 92 名)	117 名 (350 名)



(2) ボランティアさん養成講座：先生でも親でも支援者でもない、フラットな立ち位置で生徒と接していただくボランティアさんに、ミッションの理解や、引きこもり等の若者が置かれている実情（対処型支援）を知ること、校内居場所カフェ（予防型支援）の意義と価値をご理解いただき、コンプライアンスへの誓約をしていただく。

コロナによる影響：年6回をコンスタントに開催してきたが、リアル開催は1回に留まった。代わりにオンラインでの開催を試行で開催している。

ボランティアさん養成講座の振り返り

リアル開催に拘ることなく、オンラインで養成講座を実施してみたところ、全国から多くの申し込みの手応えを感じ、慌てて15名に参加定員を修正した。これは、養成講座がその実、カフェに“おかしな大人”が参加するような方たちをフィルターにかけることを目的にしているため、その挙動を確認できる人数にしたためである。また、全国に間口を広げても、実際にボランティアに参加する方はいないものと思われるため、開催する趣旨と合わず1回だけの開催となった（似た内容を有料コンテンツとして提供していきたい）。

また、大和市での養成講座は午前中に行い、午後にはカフェがあったため、そのまま3名の方がボランティアに参加して下さった。とても良い展開ではあったが、もしも“おかしな大人”がいた場合、お断りしきれないリスクもあったと思う。コロナ時代の養成講座について、まだまだ模索していく必要がある。

2020 年度実績 （ ）内は 2019 年度実績

	開催数	参加数
オンライン開催（新規）	1 回	16 名
リアル開催@大和社協	1 回（4 回）	5 名（33 名）
合計	2 回（4 回）	21 名（33 名）

(3) 個別相談事業～Drop-in～：カフェで早期発見した課題を、信頼貯金を使いながらソーシャル・ワークへと発展させていく。教員が気づいてない世帯の課題や、発達障害等を発見し、学校や SC、SSW 等の専門職と共有することで、中退や進路未決定を予防するとともに、中退後のサポートを可能とする基盤作りを目的とした事業。年間 80 件程度の個別相談を実施。田奈高校は北部ユースプラザの出張相談事業に位置づけている。

コロナによる影響：田奈高校の個別相談は、2020 年 4 月から 8 月までは実施できなかったが、9 月からは再開し、緊急事態宣言後も相談は継続するべきという学校のご判断をいただき実施した。

個別相談事業～Drop-in～の振り返り

3 月以降の Drop-in の閉鎖は、3 年間付き合ってきた 3 年生の最後と、新 1 年生の不安定期をサポートすることができず、パノラマと学校との関係が完全に切れてしまった、まさに手足をもがれた状態となってしまった。これは、新着任教員にも私たちの存在や、教員にとっての使い勝手を知ってもらえる機会を逸してしまったこととなり、激しい人事異動のある学校との関係性が、より希薄になってしまった結果となってしまった。

ただ、学校としてもこれに危機感を抱いたのか、9月以降カフェが閉鎖されても、本事業だけは継続することを学校側（管理職）が望む状況となったため、再開となったが、教員側からのリファーマーはほとんどなく、支援対象者は、カフェ利用生徒の継続案件が主な状況となっている。

年度が変わる間際に、1年生の担任から児童養護施設から登校しきている生徒のリファーマーがあり、担任と施設担当者に面談に行くなど、新しい展開が生まれたことは、今後につながる希望となったケースであった。また、学校との関係性の希薄化を憂う、中堅教師から、ケースの引き継ぎを相談室ではなく、職員室で担任と直接やり取りすることを提案していただき、年度の1月頃より実施している。これにより、生徒と担任の顔と名前がやっと一致し、熱心にメモを取る教師らモチベーションをいただいている。

2020 年度実績 （ ）内は 2019 年度実績

	開催数	相談件数
神奈川県立田奈高等学校	12 回	41 名
神奈川県立大和東高等学校	0 回	0 名
合計	12 回（回）	41 名（名）

（４）入学前支援：合格発表から入学式までの間に、希望者に対して友達づくりワークショップやカフェ体験等のレクリエーション、インテーク面談で不安を解消し、学校や当法人との信頼関係を築いた状態で入学式を迎えてもらい、中退・進路未決定者数の減少を目指す。

コロナによる影響：入学式や卒業式等の外部出席が制限されたため実施できず。

（５）中退者・卒業生支援：在学中に、カフェ等で信頼貯金を貯めていた生徒が、学校を離れてしまった後に、職場や家庭、人間関係等でのトラブルの発生により、パノラマに何らかの支援を求めたものに対応していく。

中退者・卒業生支援の振り返り

コロナ禍での大きな動きか、或いはカフェ開始 6 年目の成果か、多くの卒業生たちからの相談があった。卒後支援は、学校への配慮なしに当法人がフリーハンドで支援を組み立てることが可能となり、壮絶な虐待ケースに対し、弁護士を入れた支援を展開したり、手帳の取得から障害者年金の手続きをサポートをしたり、在学時の信頼貯金があると言う支援が可能となった。上手くいかなかった残念なケースもあったが、校内居場所カフェをはじめ 6 年が経ち、このような形で成果が現れるんだということを学んだ。

そして、もっとこの時のための準備が必要だったと反省し、以下の2点に取り組んでいる。

1. 卒業生・中退生向けカード（現在作成中）

学校から離れる生徒に対して、パノラマの公式 LINE アカウントにアクセスを促すためのカード。学校にも渡して起き、中退者に渡してもらえる仕組みを作る。

2. パノラマ公式 LINE アカウント（運営中）

現在、運用中。10時から18時までのみ利用可能で、業務時間外には BOT が簡易なメッセージで対応する。複数のスタッフが閲覧できるため、個人的なやりとりにならない。現在4名が登録。1が完成すると、登録する若者も増えていくものと想定される。

また、2020年に支援した15名の中退生/卒業生のうち、7名が北部ユースプラザに来所し相談をしている。これは、学校連携事業と北部ユースプラザが有機的なつながりを持ち始め、北部エリアの中で機能し始めてきているという手応えを感じている。ただし、居場所利用は1名にとどまっている。これは、ハイティーンが支援機関にではなく、スタッフとのつながりに価値を置いており、カフェ担当スタッフがいないと北部ユース

プラザには来ないということである。今後は、カフェ・スタッフを一部流動化させ、生徒とスタッフの出会いを点ではなく面にしていけるようにしていきたい。

2020 年度実績

	対応者数
中退生	1 名
卒業生	14 名
合計	15 名

※ 7 件が、何らかの形で北部ユースプラザとつながっている。

2. サードプレイス提供事業

(1) 居場所居酒屋汽水： ゴール設定をしない非支援を掲げ、既存の発想の若者支援ではリーチできない、ひきこもり等の若者・中高年へ、居酒屋というフォーマットのサードプレイスを提供。支援者以外の地域の大人たちを巻き込み「役割のシャッフル」を起こすことで社会的孤立を防ぎ、QOL を上げることで自立可能性を高める。8050 問題等、中高年ひきこもり支援の新たな切り口としての可能性を模索する事業。

連携団体：NPO 法人スペースナナ

コロナによる影響：5 月より ZOOM を使い、パノラマ単独のオンライン開催に切り替え、毎月一回オンラインで開催している。オンライン開催が定着している。

居場所居酒屋「汽水」事業実績（ ）は前年度

	開催数	参加数（スタッフ含む）
リアル開催	0 回（11 回）	0 名（159 名／平均 14 名）
オンライン開催	11 回（0 回）	88 名／平均 8 名
合計	11 回（11 回）	88 名（159 名）

サードプレイス提供事業の振り返り

オンライン開催に舵を切ったことは正解だった。開始当初は ZOOM に参加者が慣れるためにイベント的要素の濃い運営であったが、徐々に参加者も落ち着いていく中で、参加者からテーマを募り、語り合いの場へと変容していった。

テーマがチャット欄にリスト化され、参加者が自分の話題を選び、みんなで意見を言い合うという形式を取っている。面白いのは、必ずしも自分で出したテーマを選ぶわけではないということ。「どうやって夢や、やりたいことを見つけるのか」「苦手な人との接し方」「好きを仕事にする」「自分らしさを見つける」などから、「コロナが明けたら何がしたい？」「私がやっている健康法」「よく眠れる方法」「最近のマイブーム」などまで。

飲み会であるため、決してシリアスになり過ぎないのが「汽水」の良い点であるし、当事者の出した悩みに共感する一般参加者たちに、自分だけが悩んでいるわけではない

ことを、自然に知ってもらえる機会になっていると思う。何よりも、「（シラフの相談室よりも）酔っ払っている時の方が自分は良いと言っている」が、「汽水」開始の動機であり、その点、リアル開催時よりも、オンライン開催の方が企画意図を鮮明に打ち出せている。コロナ終息後もこの形式を継続し、オフ会的なリアル開催をスペースナナで開催する形式を模索していきたい。また、新規事業の「ブリッジ」の中高年利用者のステップの場としても活用していきたい。

3. 若年就労支援事業

（1）有給職業体験バイターン：働くことに強い不安を抱え、アルバイトに就けない生徒や引きこもり等を経験した若者がいる。就職協定から切り離れた福祉的マッチングを必要としている生徒や、通常の履歴書/面接を経た就労が困難な若者が多くいる。このような生徒が、進路未決定から引きこもり等に陥るリスクが極めて高く、引きこもり等の若者たちの出口支援として就労支援がなければ、経済的自立状態に辿り着くことができない。“安心できる大人”のいるアルバイト先を紹介し、3日間の無給の職場体験を経て有給のアルバイトとなり、働くための基礎体力をつけ、一般の就職活動をしてもらうか、そのままアルバイト先での就職を目指すことを目的とした事業。

コロナによる影響：受け入れ事業者の中の飲食店が、コロナによる業務縮小に伴い、バイトの受け入れ枠がなくなってしまった等があったが影響は少なかった。

有給職業体験バイターンの振り返り

前年度の総会で、以下のような報告をさせていただいた。

「予想以上に、新規雇用スタッフからもバイターンへの期待が高く、具体的な職業マッチング支援ができる機会として、スタッフの職業興味的モチベーションが高く、同行希望や、進んで担当になるなどが嬉しかった。」

スタッフが新たな出口のカードを得た喜びが、そのまま実績として出たという印象の1年であった（バイターンという造語が当たり前に流通している感じが考案者としては喜びでした）。数字にはなっていないが、バイターンという出口を居場所で若者たちに提示することで、「バイターンを使おうか迷っている」「なぜ一般就労では難しいと思うのか？」などというやりとりから、若者たちの自己理解（スタッフ側からはアセスメント）が進んだり、自分たちを受け入れてくれる未知の企業への期待感などが、若者たちの安心につながっていたと想像する。

また、バイターンが単独で良い成果を出したのではなく、居場所での他者との交流や受容、それにドライブをかけるイベントや、相談での悩みの吐き出しや、スタッフの言葉かけによる気づき。そして、毎月職場体験として受け入れて下さっている K 不動産や、清掃ボランティアの市民グループ、援農などの外部カリキュラムを経て、自信をつけた若者たちは、自ずと就労意欲が湧いた時に、タイムリーに提示されるのがバイターンというカードである。

北部ユースプラザを受託する際のプレゼンテーションで、入ったら出にくいコタツのような場ではなく、出入りのしやすい「縁側のようなユースプラザ」を目指すとプレゼンしたが、それにはこの出口支援のバイターンが絶対に必要だった。それが機能し始め、軌道に乗ったことは 2020 年度の大きな成果である。

モチベーションの高い担当スタッフも決まり、2021 年度は発展＝企業開拓の年にしていきたいと思う。

実施校：神奈川県立田奈高校、神奈川県立大和東高校

実施機関：よこはま北部ユースプラザ

連携団体：一般社団法人インクルージョンネットかながわ（無料職業紹介）

事業実績

3 社、7 名（不採用 1 名含む）※すべて北部ユースプラザ利用者

4. 若者自立支援事業

(1) よこはま北部ユースプラザ（横浜市補助事業）

不登校、ひきこもりなどの思春期・青年期の総合相談や自立に向けた若者の居場所の運営をするほか、地域で若者の支援活動を行っているNPO法人等の団体や区との連携を図り、地域に密着した活動を行うことを目的として、横浜市が設置し、NPO法人等が運営する施設です。対象は、都筑区、青葉区、港北区、緑区の北部エリア4区を中心に市内在住の15歳から39歳までの若者とそのご家族。常に5名体制で運営し、事業内容は横浜市の仕様に則った以下に加え、独自にバイターンや、高校への出張相談事業を加えている。

- 総合相談（電話相談、来所相談、家庭訪問等）
- 区役所におけるひきこもり等の困難を抱える若者の専門相談の実施
- ひきこもりからの回復期にある若者の居場所の運営
- 社会体験・就労体験のプログラムの実施
- 地域の関係支援機関、区役所との連携及び地域ネットワークづくり
- 応援パートナーの養成・派遣

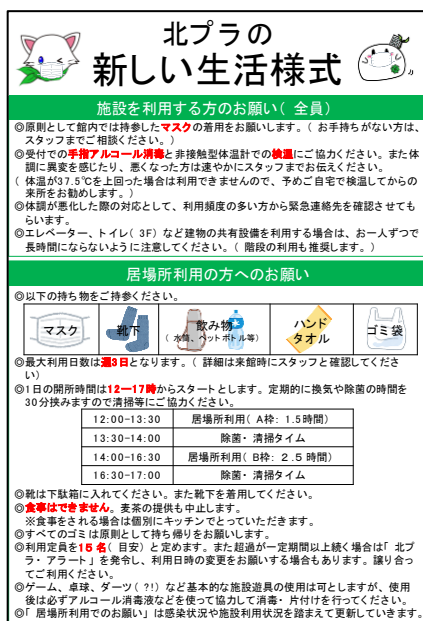
コロナによる影響：2020年4月1日から7月9日までの約3ヶ月間、居場所は休止。その間、緊急の場合のみ面談と電話相談を継続していた。再開後は、居場所のソーシャル・ディスタンスを保つために、定員を10名とし、利用者が10名を超えた場合は、入り口フロアやキッチンに移動してもらっている。

よこはま北部ユースプラザ振り返り（施設長：織田鉄也）

1. コロナと向き合いながら生まれた共同性

コロナの影響による度重なる休館期間延長を経て、再び開館したのは7月10日。コロナとどう付き合い、運営を維持していくか苦慮し続けた2020年度だった。着手したのは、環境面では使い捨てマスク、アルコール消毒液、非接触型体温計に加えて、相談室用のアクリルパーテーションや乾燥対策の加湿器なども設置し、館内のソーシャルディスタンスや定期的な換気や除菌といった対策も講じた。

3月冒頭の閉館は急激で多くの利用者が戸惑った。なかには開館時期が定かでないことに怒りを表明する者もいた。開館にあたっては、利用者に利用ルールを一方的に説明するのではなく、一人ひとりの気持ちや意見を聞く機会として『さ・い・か・い』というトークイベントを複数回行った。スタッフ・利用者それぞれの立場で意見交換を繰り返すこと自体が、社会参加経験そのものに通じていくものと考えた。



北プラの新しい生活様式』チラシ



居場所に掲示した北プラ・アラート

2. 仲間/社会と出会いそのものへ

「北プラの新しい生活様式」の大きな懸念は、来館者数の制限にあった。コロナ禍以前は20名程度の来館が常態化していたが、半減を追求する必要があった。他方で公共性のあるサードプレイスとして、都度、利用者同士で譲り合ったり話し合ったりして決められるような余地を残し、利用者自身が場の運営の一端を担える余地を残しておくことも、これまでの利用のあり方や、自立支援という支援の性質をふまえれば重要と考え、週3日制という利用日数の制限の仕組みを取り入れた。結果として2020年度の来館者数のコントロールは概ねうまくいったように思われる。

居場所の集団形成には面白い変化も見えた。利用人数が少数にとどまるからこそ、小規模な自主的なプログラムがいくつも開花した。身近な利用者仲間同士で、やりたいことを出し合い企画化するという動きも見られた。大規模なイベントや食事づくり、整体

などといったボディタッチが生ずるプログラムが次々に中止になり、日常的にできる活動が少なくなっていく中で、真っ先に広がったのは、コミュニケーションそのものを目的とした活動だった。こういった流れに感化されて、これまで企画化に興味のなかった利用者からもアイデアが出るような場面もあり、利用者同士が知恵を出し合い、コロナ禍の閉塞感を打破し、自分たちの幸福を自分たちで創出しようという試みがなされていたように思われる。

これとは別に、2020年度は外部との連携の取り組みも着実に広がった。社会体験としてつながっていた企業の紹介で環境問題に取り組む地域住民団体とつながり、合同でボランティア清掃を行うようになった。別の企業からは複数の利用者とオフィスでの雑務を手伝わせてもらうようになった。作業が終わった利用者にお茶を出していただき、「どうだった？」と訊いてきてくれる従業員とのゆるくアットホームな関係は、就労経験のある利用者も目を丸くした。働くという行為が単なる対価を得る作業なのではなく、何気ない日常生活の一部であるということを感じることもできる瞬間でもあったように思われる。

年度末には他の若者支援団体とフットサルを通じた交流企画も実施した。他団体の支援者や利用者との出会いは、社会との出会いの一手手前にある、より同質性や共感性も高い他者との有意義な出会いでもある。これは、安心・安全な反面、大きな社会から切り離された孤島のような居場所を目指すのではなく、社会と地続きで緩やかに開かれた

居場所を目指していくことが、ひいては利用者自身の中に潜む「自分だけ／自分は特殊」という孤立化へのドグマ（＝スティグマ）を自然と解いていく手がかりになることを期待しての取り組みだった。

4. コロナの先を見据えて

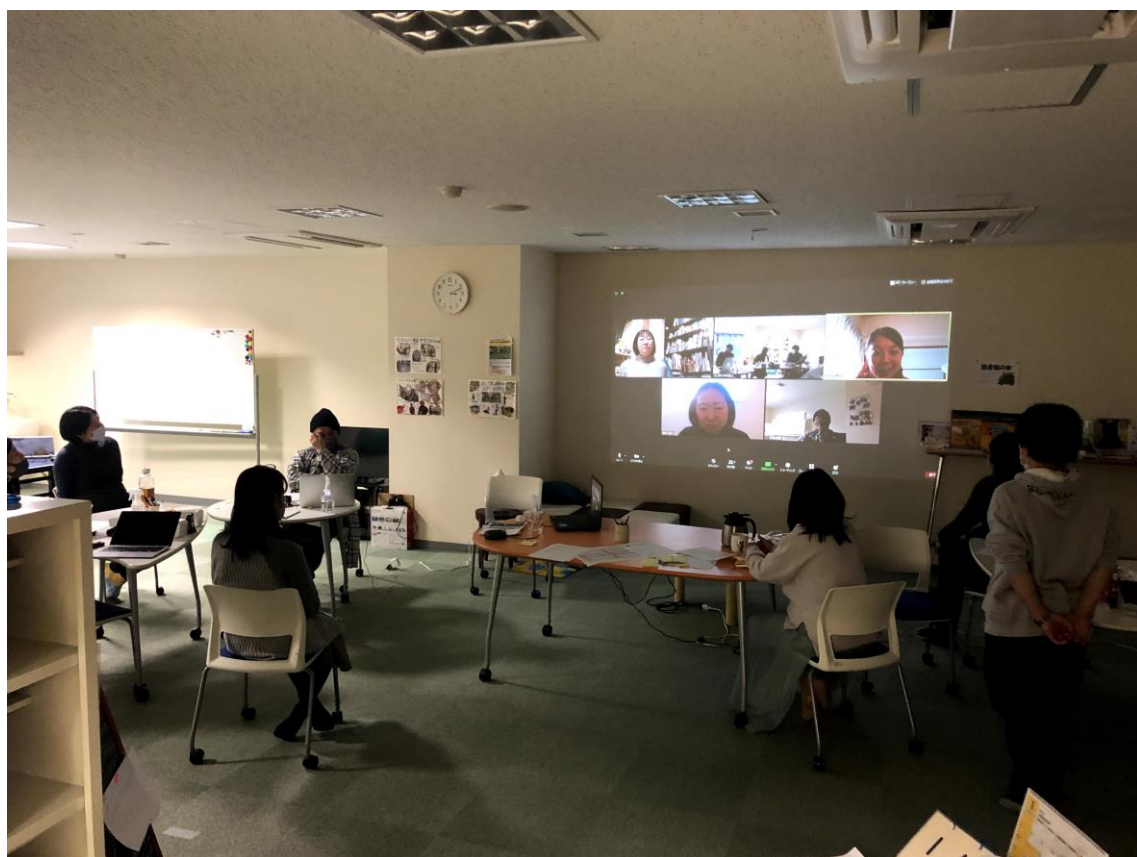
コロナ禍で、ケースワークはことごとく中断を余儀なくされた。それでも電話相談を通じて交わされたものは、開館していた頃のような他愛もない日常会話の再現だった。

「久々に〇〇と会ったよー」「どうだった？」「えー、普通」「なにそれー？」「なんかこういうふうに話すのっていいね」「あーあ、早く北プラ開かないかなー。あ、でも今は行くのは面倒くさい（笑）」。

孤立を抑止し、関係性をつなぎとめることは、単なる現状維持ではなく、若者たちが再び社会に信頼を寄せ、コミットしていけるようになるための言わば試金石だ。「信頼貯金」—私達はこれをそう呼んできたのであった。人は、どれだけたくさんの優しさに触れ、自己の存在を肯定され、信頼を託され、多くの人たちに支えられたかによって、自身のポテンシャルを推し量る生き物なのかもしれない。自粛生活の中でも小さな喜びを見出し、決して現状にとどまらないこと。それは広い意味での「ストレングス」だ。コロナは私たちに改めて「ストレングス」に主眼においた支援の重要性を再認させた。

よこはま北部ユースプラザ実績

	2020 年度	2019 年度
開所日数	275 日 ※コロナ対応で 4 月 1 日から 7 月 9 日まで居場所は休止	274 日
利用者数（本人・保護者・関係機関を含む）	延べ 2,865 名	延べ 4,458 名
新規来所者（見学・保護者のみ含む）	92 名（本人性別：男 63 名、女 29 名）うち 60 名が新規登録	85 名
応援パートナー登録数	延べ 28 名（個人 16 名、団体 2）うち新規：個人登録 5 名	延べ 23 名（個人登録 11 名、団体登録 2 団体）
応援パートナー実施回数	12 回	29 回



コロナにより、全体会議もオンラインでの参加を認めて実施しています。

6. 啓発事業

(1) 校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業

「校内居場所カフェ運営者・実施者人材育成の事業」（継続1年目）

2020年度より「大和証券グループ 輝く未来へ こども応援基金」による、「校内居場所カフェ・スタッフ育成事業」に取り組んでいるが、継続申請が通り2年目となる。他団体カフェへのヒアリングや視察から、テキストの作成を目指す。

校内居場所カフェ・スタッフ養成講座事業の振り返り

コロナにより、従来事業の維持継続に翻弄されてしまい、本事業への取り掛かりが遅れてしまったり、予定していた委員会の開催ができなくなる等の影響がある中、自分たちが伝えたいことを教える講座ではなく、受講者が知りたいことを伝える講座であるべきだと考え、予定していなかったがニーズ調査をオンラインで行い85件の回答を得ることができた。

大きな印象としては、支援者たちやカフェ実施希望者たちは、「知りたい」から「やりたい」に気持ちが大きく動いているということであり、受講案内希望者は回答者の70%にも達したが、そのうちのカフェ実施者33名のうち20名（60%）が受講を希望している。恐らく、手探りでカフェを開催しているが、何らかの行き詰まりを感じてた

り、生徒たちにとって、より良いカフェ運営のために、我流ではなく体型的な学びを求めているのだろうと感じている。

最も関心が高い項目は「学校との情報共有や連携方法について」だった。これらのニーズをもとに、委員会を開催し、高校関係者から生徒情報の流れ等を聞き取ることができた。また、実践者からは、カフェでの成功事例をヒアリングさせていただき、カフェの持つ可能性を改めて実感することができた。これらのエピソードからスキルを抽出し、テクニックに分解しつつテキストに落とし込んでいく予定である。

（２）各種広報事業

「すべての人をフレームイン！」というミッション・ヴォイスに基づき、パノラマの活動や実践を言語化し、広く発信することで、私たちが課題と感じていることを社会課題として認識を広げ、ファンの獲得や行政へのアドボカシー等、幅広く支援の輪を広げていくことを目的とした事業。

1. 「6周年記念オンライン・イベント～居場所カフェ、その後-高校連携事業の10年と卒業後支援を語る～」3月28日（ZOOM）

横浜パーソナル・サポート・サービス（内閣府モデル事業）から現パノラマ理事長・石井正宏が田奈高校に出向き、相談と学校図書館司書室で生徒と共に過ごす
タイルの支援を始めて今年で10年になります。2014年には同高校で居場所カフェ

を開始、2015 年には NPO 法人パノラマを設立し、高校連携事業を運営してきました。この 10 年の間、在学中に多くの生徒たちと出会い、溜めた信頼関係を元に、彼ら彼女らが卒業した後も SOS を受け止め、支援する「卒後支援」を続けてきました。本イベントでは、不利な環境で育ってきた若者がいかに中退・卒業後困難な状況を超えていくことが難しいか、社会からいかに容易に排除されていくか、卒後支援の必要性和有効性を語り合います。

登壇者パネリスト

- ・ 金澤信之（元田奈高校教諭）
- ・ 石井正宏（NPO 法人パノラマ理事長）
- ・ 山浦 彬仁（NHK 制作局第 2 ユニット クローズアップ現代）

コーディネーター

- ・ 鈴木晶子（NPO 法人パノラマ理事）

2. 石井と小川の『そんなこと訊かれても』（note）

校内居場所カフェの啓発と、パノラマのブランディングを目的とし、2021 年 2 月 3 日に連載を開始した。寄付込み価格として 1 話 300 円での有料コンテンツとして販売している。現在第 10 話（継続中）

<https://note.com/npopanorama/n/nc192a8d78119>

3. ぴっかりカフェ手ぬぐいの制作（販売開始）

青葉区の手拭い作家「sometae」の近藤妙子さんにデザインしていただき、染めは京都の老舗「馬場染工場」さんをお願いしました。近藤さんには、何度もぴっかりカフェに足を運んでいただき、カフェの雰囲気を感じてもらいながら、カフェにあるアイテムなどでデザインしていただき、色はパノラマのイメージ・カラーでもあるイエローにちなみ「たんぼぼ」という色にしてもらいました。寄付込み販売価格 2,000 円。



以上